

# 夜討曾我

前

シテ 曾我の五郎時致

ツレ 兄十郎祐成

トモ二人 従者団三郎 同じく鬼王

後

ツレ 古屋五郎

同じく 御所の五郎丸

同じく（二人） 敵兵

シテ 五郎時致

地は 駿河

季は 五月

シテ、ツレ、四人  
次第

「其名も高き富士の嶺の。く。御狩にいざや出で  
うよ。」

十郎詞

「是は曾我の十郎祐成にて候。さても我君東八箇国  
の諸侍を集め。富士の巻狩をさせられ候ふ間。我  
等兄弟も人なみにまかりいで。唯今富士の裾野へ  
と急ぎ候。」

四人サシ

「今日出で、いつ帰るべき故郷と。思へば猶もいとゞ  
しく。」

歌

「名残をのこす我宿の。く。垣根の雪は卯の花の。  
咲き散る花の名残ぞと。我足柄や遠かりし。富士  
の裾野に着きにけり。く。」

十郎詞

「急ぎ候ふ程に。是は、や富士の裾野にて候。いか  
に時致。しかるべき所に幕を御打たせ候へ。」

シテ詞

「畏つて候。」

十郎

「いかに時致。今にはじめぬ御事なれども。我君の  
御威光のめでたさは候。打ちならべたる幕の内。」

目をおどろかしたる有様にて候。かほどに多き人の中に。我等兄弟が幕の内程物さびたるは候ふまじ。

シテ「さん候今にはじめぬ君の御威光にて候。さて彼あらましは候。

十郎「あらましとは何事にて候ふぞ。

シテ「あら御情なや。我等は片時も忘るゝ事はなく候。彼祐経が事候ふよ。

十郎「げに／＼某も忘るゝ事はなく候。さていつをいつまでながらへ候ふべき。ともかくも然るべきやうに御定め候へ。

シテ「御諚の如く。いつをいつとか定め候ふべき。今夜夜討がけに彼者を討たうずるにて候。

十郎「それが然るべう候。さらばそれに御定め候へ。や。思ひいだしたる事の候。我等故郷を出でし時。母にかくとも申さず候ふ程に。御なげきあるべき事。

是のみ心にかゝり候ふ間。鬼王か団三郎か。兄弟に一人形見の物を持たせ。故郷へ帰さうずるにて候。

シテ「げに是は尤にて候ふさりながら。一人帰れと申し候はゞ。定めてとかく申し候ふべし。唯二人ともに御かへしあれかしと存じ候。

十郎「尤にて候。さらば二人ともに此方へ参れと御申し候へ。

シテ「畏つて候。いかに団三郎。鬼王此方へ参り候へ。

団三郎「畏つて候。

シテ「団三郎兄弟是へ参りて候。

十郎「いかに団三郎。鬼王もたしかに聞け。汝兄弟に申すべき事を承引すべきか。又承引すまじきか真直に申し候へ。

団三郎「是は今めかしき御錠にて候。何事にても候へ御意を背く事はあるまじく候。

十郎「あらうれしや。さては承引すべきか。

団三郎「畏つて候。何事も御淀をば背き申すまじく候。

十郎「此上はくはしく語り候ふべし。さても我等が親の敵の事。彼祐経を今夜夜討がけに討つべきなり。兄弟空しくなるならば。故郷の母歎き給はん事。あまりにいたはしく候ふ程に。形見の品々を持ちて。二人ながら故郷へ帰り候へ。

団三郎「是は思ひもよらぬ御淀にて候ふ物かな。御意も御

意にこそより候へ。此年月奉公申し候ふも。此御大事に真先かけて討死仕るべき為にてこそ候へ。何と御淀候ふとも。此義においては罷り帰るまじく候。鬼王さやうにてはなきか。

鬼王「中々の事尤にて候。まかり帰る事はあるまじく候。

十郎「何と帰るまじいと申すか。

団三郎「ふつゝとまかり帰るまじく候。

十郎「是はふしぎなる事を申すものかな。さてこそ以前

に詞をかためて候ふに。さてはふつゝと帰るまじきか。

團三郎「さん候。

十郎「汝はふしぎなる者にて候。なふ五郎殿あれを御帰し候へ。

シテ「畏つて候。やあ何とてまかり帰るまじいとは申すぞ。さやうに申さうずると思し召してこそ。始より詞をかためて仰せられ候ふに。何とて帰るまじ

いとは申すぞ。しかと帰るまじきか。

鬼王「まづ畏つたると御申し候へ。

團三郎「畏つて候。

シテ「しかと帰らうずるか。

團三郎「まかり帰らうずるにて候。

シテ「あふそれにてこそ候へ。まかり帰らうずると申し候。

十郎「何と帰らうずると申すか。

団三郎「さん候。いかに鬼王に申し候。

鬼王「何事にて候ふぞ。

団三郎「さて何と仕り候ふべき。まかり帰れば本意に非ず。帰らねば御意に背く。とかく進退こゝに窮つて候。

鬼王「仰せの如くまかり帰れば本意に非ず。又帰らねば御意に背く。我等も是非をわきまへず候。但し急度案じいだしたる事の候。いづくにても命を捨つるこそ肝要にて候へ。恐れながら団三郎殿と是に

て刺し違へ候ふべし。

団三郎「げにげにいづくにても命をすつるこそ肝要なれ。いざさらば刺しちがへう。

鬼王「尤にて候。

シテ「あゝ暫く。是は何としたる事を仕り候ふぞ。

十郎「やあ兄弟の者帰すまじきぞ帰すまじきぞ。まづく心を静めて聞き候へ。今夜此所にて祐経を討ち。我等兄弟空しくならば。さて故郷にましま

す母には誰か斯くと申すべきぞ。敬ふものに従ふは。君臣の礼と申すなり。之を聞かずは生々世々。長き世までの勘当と。

地

「かきくどきのたまへば。く。鬼王団三郎。さらば形見を賜はらんと。いふ声の下よりも。不覚の涙せきあへず。

地クリ

「夫れ人の形見を贈りしためしには。彼唐の樊噲が。母の衣を着替へしは。永き世までのためしかや。

十郎サシ

「今当代の弓取の。母衣とは是を名づけたり。

地

「然れば我等が賤しき身を。譬ふべきにはあらねども。恩愛の契りのあはれさは。我等を隔てぬ習ひなり。

クセ

「さる程に兄弟。文こまぐと書きをさめ。是は祐成が。いまはの時に書く文の。文字消えて薄くとも。形見に御覧候へ。皆人の形見には。手跡に勝る物あらじ。水茎の跡をば。心にかけて弔ひ



給へ。老少不定と聞く時は。若き命も頼まれず。  
老たるも残る世の習ひ。飛花落葉の。ことわりと  
思し召されよ。其時時致も。膚の守りを取りい  
し。是は時致が。形見に御覧候へ。形見は人のな  
き跡の。思ひの種と申せども。せめて慰むならひ  
なれば。時致は母上に。添ひ申したると思し召せ。  
今までは其主を。守仏の観世音。此世の縁なくと。  
来世をば助け給へや。

十郎「既に此日も入相の。

地「鐘もはや声々に。諸行無常と告げ渡る。さらばよ  
急げ急げ使。涙を文に巻きこめて。其まゝやる文  
の干ぬ間にと。詠ぜし人の心まで。今更思ひ白雲  
の。かゝるや富士の裾野より。曾我に帰れば兄弟。  
すごくと跡を見送りて。泣きて留まるあはれさ  
よ。く。(中人)

後ヅレ一声「寄せかけて。打つ白波の音たかく。関を作つて騒

ぎけり。

後ジテ

「あらおびたゝしの。軍兵やな。我等兄弟うたんとて。多くの勢は騒ぎあひて。こゝを先途と見えたるぞや。十郎殿十郎殿。何とて御返事はなきぞ十郎殿。宵に新田の四郎と戦ひ給ひしが。さては早討たれ給ひたるよな。くちをしや死なば骸を一所とこそ思ひしに。物思ふ春の花ざかり。散りぐになつてここかしこに。骸をさらさん無念やな。

地

「味方の勢は是を見て。く。打物の鏑本くつろげ。時致を目がけてかゝりけり。

シテ

「あら物々しやおのれ等よ。

地

「あら物々しやおのれらよ。先に手並は知るらん物をと。太刀取りなほし。立つたるけしき。ほめぬ人こそなかりけれ。かゝりける所に。く。御内方の古屋五郎。樊噲が怒りをなし。張良が秘術を尽しつゝ。五郎が面に切つてかゝる。時致

も古屋五郎が抜いたる太刀の。しのぎを削り。しばしが程は戦ひしが。何とか切りけん古屋五郎は。二つになつてぞ見えたりける。かゝりける処に。く。御所の五郎丸。御前に入れたてかなはじ物をと。膚には鎧の袖を解き。草摺かろげにざつくと投げかけ。上には薄衣引きかづき。唐戸の脇にぞ待ちかけたる。

シテ「今は時致も運櫓弓の。」

地「今は時致も運櫓弓の。力も落ちて。まことの女ぞと油断して通るを。やり過し押しならべ。むんずと組めば。」

シテ「おのれは何者ぞ。」

五郎丸「御所の五郎丸。」

地「あらものくしとわだがみつかんで。えいやくと組みころんで。時致上になりける処を。下よりえいやと又押し返し。其時大勢おり重なつて。千

筋の縄をかけまくも。かたじけなくも君の御前に。  
追つ立て行くこそめでたけれ。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈第三輯』大和田建樹 著